

機とからだの 一体感!

機は全身運動です

★当社の織機はお求めになられる方の身長に合わせて製作しております。

高織型



高織型 織幅 50cm・60cm・100cm

○型機としても使用できます。
○千巻台としても使えます。

柳式 X 型

織幅 50cm・60cm・100cm
織幅 50cm で畳一帖分のスペース



柳式 X 型

織りの途中でも折りたためます。
折畳むと織幅 50cm で畳一帖分のコンパクト設計です。

○機は全身運動です。腕の動き、足の動き、打ち込みの力が伝わる身体の位置など、身体寸法の道具が自然に入らなければ、中味のある作品は生まれません。部屋の中で機を動かすのみならず、細部にわたり、機の内容を知る事が大切です。

●事務所が移転しました
クマクラ織機

〒352 埼玉県新座市あたご2丁目2-13
0484-82-1250代
FAX 0484-82-1255

☆カタログご希望の方は、切手450円を当社へお送り下さい。初めての方にもわかり易い、手づくりのカタログをお送り致します。



④ 絹・技法博物館の収蔵織見本帳の書庫



③ 工業専門学校プリント実習



② ピンケッティ氏のレディーフ

また高級絹織物業者の組合規約には、毎年、親方が機と職人の数を公国に提出しなければならぬこと、などが記されている。

その後、コモで機械製糸が始まり、一八世紀半ばには、機械製糸機が二〇〇台を越えるまでになった。

一九世紀に入ると、フランスでジャカード機が発明され、コモもその技術を取り入れ、一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、織物業が盛んになってゆく。

フランスのリヨンで技術を学んだ人の中に、ピンケッティ(Pinchetti)という人がいる。彼は一八六〇年代に、その技術を広めるべくコモに技術学校を作り、これが現在の「国立織物工業専門学校」(ISTITUTO TECNICO INDUSTRIALE STATALE DI SETIFICO)の前身である。

この学校は五年制で、工業生産のテキスタイルに関する技術やデザインなどを教えている。生徒はテキスタイル関係の仕事をしている家の子供が多く、また、周辺のテキスタイル会社が、生徒に奨学金を出すシステムもあり、織物の産地コモと密接に係わっている。一九七四年に現在の場所に移り、モダンなコンクリート造りの校舎で、約二二〇〇人の生徒が学んでいる。校内に二つの絹の博物館があり、教育の一環としても生かされている。

絹・技法博物館

この博物館(MUSEO DELL'ARTE SERICANA)は、学校内の図書館に併設されている。ディ・ジローラモ教授の案内で、様々な資料を見せてい

もう一つの博物館(MUSEO DIDATTICO DELLA SETA)があり、入口も外から直接入れるようになっていて、

この博物館は、一八世紀から一九世紀にかけてコモで行なわれた絹織物の生産に関する織機や道具、記録などを展示している。それは一八世紀末、イギリスから始まった産業革命が一九世紀に入り、ヨーロッパへ波及した時期にも一致している。生産方法が根本的に変わって行く過程で、コモでも様々な取り組みが行なわれ、手仕事から動力生産へ移って行く、ごく初期段階の道具が興味深い。各部屋は、それぞれテーマ別になっていて、織、染(布染・糸染)、プリントなどに分かれています。

一番奥は繊維試験場のようになっていて、顕微鏡、堅牢度を調べる様々な道具類などが並んでいる。

織りの展示室では一九世紀に使われていた、手機でありながらドビーとジャカード機を組み合わせたような織機が置かれている。踏み

ただいた。

ここに収められているのは、絹の製品と膨大な織見本である。壁いっぱいプリントのスカートが下げられ、所蔵されている枚数は二五〇〇点にも及ぶという。

奥の書棚には、大きな織見本帳が何十冊もならんでいる。一九世紀後半、ミラノで開かれていた、絹織物の見本市で使われた見本帳、リヨンから取り寄せた布見本、リボンばかりを集めた見本帳などが、当時のコモの絹織物業の様子を伝えている。

中央にはスライド式の大きな収納棚が置かれ、イタリアやフランスなどで織られた古い布や服が納められている。こうした布は、当時使われていた織のテクニックを知る上でも貴重なもので、イタリアの伝統的な織技法の他に、フランスの影響も色濃く見られる。技法の呼び方も、コモではフランス語で、そのまま使われていた。

ランセ(LANCE)織織の一種で、絵柄となる緯糸が耳から耳まで通っているものを言う。プロシエ(BROCHÉ)縫い取り織と呼ばれるもので、地組織の他に絵柄の所は、それを構成する別の緯糸が入る。

大きな木のテーブルが置かれたこの博物館は、図書館と共に資料室といった感じで、必要な時いつでも、資料や見本帳をひろげて見る事ができるようになっている。

絹の教育博物館

同じ学校の校内に、広いスペースを取った

木は一本で、総統枠が八枚あり、その奥にジャカード用の矢金が下がっており、上部に紋紙がセットされている。この紋紙の前身と言うべき木製の板も展示してある。これは穴を開けるのではなく、あらかじめ板に開けてある穴に、模様によって、機をはめ込む方式のめずらしいものである。

染めの展示室は木製の大型染色槽や、少量の糸を染める為のピロー(PIROLA)と呼ばれる銅製の箱型桶、ひしゃく、糸を乾かす為の棚などが展示されている。当時の染色工場ではこの木製の染色槽が何十台も置かれ、様々な色に布が染められていた。

プリントの展示室には、ブロックプリント用の版木が集められている。これはプランシェ(PLANCHE)と呼ばれ、フランス語がそのまま使われている。版は木と金属とがあり、木の方は、版の側が梨の木、裏はリンゴの木で作られている。梨の木は、節が少ないので版に向いているという。金属の方は木の土台に鉛と亜鉛とアンチモンの合金でできた版を付け



⑤ 19世紀後半のミラノ見本市で使った絹織物の見本帳



⑥ プランシュと称するブロックプリント用の版木



⑩ 金属の模版版を付けた版木



⑧ 同見本帳に貼った絹織員地



⑦ 絹の教育博物館の展示の紋織装置を付けた手織



⑨ 染めの展示室の染色用器材類



であり、いずれもタテ二〇センチ、ヨコ三〇センチくらいの大きさになっている。
 リオネーゼと呼ばれるシルクスクリーンは、一九〇〇年代初めにフランスのリヨンから伝わったものだが、当初はスクリーン用のヘラを布の経糸方向に動かして染めていたという。この博物館の構想は、「二七年生まれの仲間達」という、同じ一九二七年に生まれた地元の有志四人によって作られた。いずれもコモを愛する人々である。
 ささまざまな機械や道具、記録など、忘れられ放置された物が集められ、それらを修理し整備する作業が始められた。そして三年後、学校側から提供された現在の場所を得て開館した。運営は、「二七年生まれの仲間達」と学校の同窓生があたっている。
 この博物館を見ていると、コモと絹との深い係わりが伝わってくる。二度目に訪れた日はこの「仲間達」の人達が、古い写真記録を持ち込み整理していた。彼らは、いずれも絹の生産とは直接関係のない弁護士であったり、公認会計士といった肩書きを持った人々であるが、博物館は、こうした人達に支えられているのである。
 学校内での開館に尽力された校長のグラッシ氏をお訪ねすると、校長室の前の廊下に出て下校する生徒達をじっと見ておられた。次の世代を担って行くまだ一〇代の彼らへのまなざしには、深い思いが込められているように見えた。

今回、この地の人とのインタビューを通して、様々な世代の人々が、絹に直接係わりながら暮らしているコモは、やはり絹の町といわれるにふさわしいと思った。それは表面的なものではなく、今でも生産地として生き続けているこの地方の五百年にわたる歴史と、それを支えて来たコマスコ(COMASCO)と呼ばれるコモの人々の血の中に流れる、絹への情熱によるものだと思えてならない。
 ○ MUSEO DELL'ARTE SERICA
 ○ MUSEO DIDATTICO DELLA SETA
 住所: Via Valleggio, Istituto Sefichio Como, ITALY
 TEL: 031 2003180
 予約制 (見学希望者は、電話で予約をすること)
 (テキストイルデザイナー/さいとう・ゆみこ
 ■訂正 八月号掲載の「イタリア染織紀行」の本文写真で五六頁上の「織機を成くベッティネ」は、木製のカヴァリーノの織りに付き、訂正してお詫び致します。(編集部)



⑤ 紋紙使用前は木製の版に穴をあけて使っていた